

YAD LOG

ヤド
ログ

松田町寄(やどりき)発。暮らしと記憶を記録する地域誌

TAKE FREE

VOL.
01

2025 秋

Web版はこちら

「寄り道」から始まる、もう一つの日本の風景



「寄り道」から始まる物語―

ひと、暮らし、そして風景を記録する雑誌

「YADLOG（ヤドログ）」は、松田町寄（やどりき）地区の風景と営みをテーマにした、地域発の小さな雑誌です。タイトルは、地名「YADORIKI」と記録を意味する「LOG」を掛け合わせた造語。全ページを通じて、「寄り道」という言葉から始まる各記事では、地域に暮らす一人ひとりの言葉と人生を丁寧に記録。観光情報や広報誌とは異なり、―その人が生きてきた風景―をそつとすくい上げ、誌面に綴っています。

創刊号では、寄にある7つの集落から、それぞれを代表する住民へのインタビューを掲載。茶畑や地域の自然を守り続ける人、古道や景観の保全活動に携わる人、宿泊・観光業を営みながら地域に関わる人など、多様な声と暮らしを記録しています。



寄り道の、花の里で

帰ってきた場所で紡ぎ直す、風景と人のつながり

安藤公一 さん
あんどう こういち

01

Web版はこちら

萱沼へ、再び

1996年、安藤さんは32年間の会社員生活を終え、ふるさとの萱沼に戻ってきた。長く勤めた量販店では営業や本社のバイヤー業務など多岐にわたる役職をこなし、北海道にも通っていたという。「若いころに町を出てからは、ずっと外の世界で暮らしていました。戻ってきた当初は、顔なじみも少なくてね。」かつて遊んだ川や畑、山道。懐かしい風景のなかで、少しずつ日々の営みが始まった。野菜を育て、栗を拾い、桜やお茶を育てる暮らし。畑に出るようになり、地域の行事や清掃に参加するようになったことで、自然と人との縁が広がっていった。

土地をつなぐ、記憶を守る

「祖先が残してくれたものだから、大事にしなければと思うのです。」安藤さんの家は、茶畑や栗林、野菜を育てる畑など、山裾に広がる複数の土地を代々受け継いできた。飛び地も多く、自分の土地を把握するだけでも一苦労だという。それでも「草ぼうぼうにはしたくない。」と、定期的に草を刈り、貸し出せる場所は活用してもらっている。山の上には、古い八重桜の畑もある。「見るだけでもきれいだから。」と、春には満開の花が迎えてくれる。季節の移ろいに合わせて変わる風景に目を配りながら、畑仕事は今も続いている。

やっぱり風景って、誰かが手入れ
しているから残るものなんですよ。



「役」によってつながる

地域活動の中心にいる安藤さん。これまで自治会長を3期、さらに現在は寄地区振興協議会の会長も務めている。「最初は静かに暮らそうと思っていただけ、気づけばいろんな役を引き受けるようになってました。」道路清掃に、ロウバイまつりや若葉まつりの運営、観光や自然休養村の整備にも携わる。まちづくりの話題が出ると、必ず名前が挙がる存在だ。「自治会に入ったことで、人と話す機会が増えていったんです。皆さんに助けてもらってばかりですけどね。」そう笑う安藤さんの姿は、今では地域の「顔」のひとりとして、多くの人から頼られている。



楽しみは、花と人

「この土地の好きなところ？やっぱり、花ですね。」中津川沿いのしだれ桜、水源林の散策路、畑に咲く桜や藤、さつき、そして季節の移り変わり。花を愛でる心は、幼いころ川遊びをした記憶とともに、ずっと心の中にある。「春には孫たちが遊びに来て、一緒にお茶摘みや桜摘みを手伝ってくれるんです。あれは本当に楽しい時間ですね。」外から訪れた人にも『こんないい場所があるなんて』と驚かれることが多い。週末にふらりと農作業に参加する人や、若い移住者の姿も少しずつ見られるようになった。「寄ってみれば、いいところだってわかるんです。まずは知ってもらいたいこと、それが何より大事だと思います。」

続いていく風景のために

「やっぱり風景って、誰かが手入れしているから残るものなんですよ。」そう語る安藤さんの言葉には、萱沼の風景とともに歩んできた時間の重みがある。土地を整え、季節の花を見上げ、山や畑の草を刈る―その一つひとつが、風景をつなぐ営みだ。ふと見渡せば、手入れされた畑の先に広がる静かな山並み。その風景も、きっと誰かが守ってきたものなのだろう。そう思えることこそが、この土地に在ることの尊さなのかもしれない。これから先、誰がこの風景を担っていくのか。その答えはまだはっきりとは見えない。けれど、こうして語り継がれる記憶と暮らしの積み重ねが、きつと未来の寄を形作っていくのではと思う。

むしざわたしろ
虫沢田代

寄り道の、古道にて

静かな山里で道をつなぎ、人をつなぐ。
古道に込められた15年の思いと未来への願い。

虫沢古道を守る会代表

飯田昌之 さん
いいだ まさゆき

02

Web版はコチラ

静かに流れる、虫沢の日々

「この川沿いの田んぼ、昔はホタルがいっぱいだったんです。」そう語る飯田さんが暮らすのは、虫沢地区。35年以上前に移住し、静かな山あいの集落で新たな暮らしを始めた。虫沢川のせせらぎが響くこの土地に魅せられたのは、自然の豊かさと人のあたたかさだった。「来たばかりの頃は、本当に地域の人たちが歓迎してくれた。『よう来てくれた』って。そんなふうに迎えられたのは初めてだったから、うれしかったですね。」町内会や組織での行事も多く、地域とのつながりが自然に生まれる。「子ども神輿」や「悪魔祓い」とった伝統行事を通じて、子どもたちも地域の一人として育っていった。

ホタルのヒカリと復活の願い

「家の中までホタルが飛び込んでくるような場所でしたよ。」かつての虫沢は、初夏になるとホタルが乱舞する幻想的な風景が広がっていた。しかし、人の暮らしや環境の変化によりその姿は年々減少。そこで立ち上がったのが、地域有志による「虫沢源平クラブ」だった。「ホタルを守ろうと、みんなで水路の整備をしたり、カワニナ（ホタルの幼虫の餌）を育てたり。気がつけば、15年も続いていました。」ホタルをきっかけに集まった仲間たちは、地域の自然を守る活動へと広がっていく。



古道をつなぐ、7人の志

飯田さんがもうひとつ力を注ぐのが「虫沢古道を守る会」だ。炭焼きの名残をたどり、かつて人が往来していた山道を整備し直す活動を、7人の有志で始めたのが2010年のこと。「山北との境にある『花じょう道』を再生させようって、まずは歩いて、地元の年配の方から話を聞いて。ああでもない、こうでもない」と道を探したそうです。「開通式では山北側と松田側から歩いてきた参加者が両町の境にまたがる『ヒネゴ沢乗越』で合流し、高松山頂上をめざしました。頂上は一面雪化粧で開通式を祝っているようでした。飯田さんは「まるで昔のお嫁入り道のようにですね。」と笑う。現在も年に数回、町の協力も得て案内看板の設置や道の整備が続いている。道をつなぐことで、地域の記憶もつながっていく。

未来につなぐ子どもたちとの時間

「小学生と一緒に階段を作ったり、水切りを設けたりしてね。あの経験がいつか思い出になってくれたら。」虫沢古道を守る会では、小学生との体験学習も行った。自然の中で過ごした時間が、子どもたちの心にどのような種を蒔いているのかはまだわからない。でも、それが地域に戻るきっかけになったら、と飯田さんは願う。「いつか『昔ここで階段作ったんだよね』って思い出して、戻ってきてくれたら嬉しいよね。」そんな思いを込めて、今も草を刈り、道を整え、子どもたちの笑い声が響く風景を守り続けている。

総合力で、集落の未来を

最後に、これからの虫沢について尋ねると、飯田さんはこう答えた。「虫沢だけでなく、他の集落も、みんなで協力して、寄全体を盛り上げていけたらと思っています。」耕作放棄地が増え、伝統行事も姿を変えつつあるなかで、地域の風景やつながりをいかに守り継いでいくか。その鍵は、やはり「人」なのだろう。「やっぱり人のあたたかさですよ。ここには、それがある。」寄の山間に流れる、あたたかな風と人の営み。その記憶を、次の世代へとつないでいく——飯田さんの静かなる情熱は、今も虫沢の風景の中に息づいている。

やっぱり人のあたたかさですよ。

ここには、それがある。



寄り道の、 蜂花苑

ほう
か
えん

75歳、キャンプ場の経営者。JTBから箱根町観光協会、そしてキャンプ場経営へ。「やどりき愛」と歩んだ観光人生

蜂花苑オーナー

高橋始 さん
たかはし はじめ

03

Web版はコチラ

思ったよりずっと近い自然

「こんなに東京から近くて、自然が豊かなところがあるなんて。」蜂花苑キャンプ場を訪れた客の多くが、そう驚く。新松田から車でわずか20分。中津川の清流に面したこのキャンプ場を、高橋さんは4人の従業員と共に切り盛りしている。今では多くのリピーターを抱える人気施設となったが、その背後には、観光業に生涯を捧げた男の静かな情熱と積み重ねられた経験があった。

旅行会社から観光地の裏方へ

「もともととは、ずっとJTBだったんですよ。」高橋さんは生まれも育ちも寄。高校卒業後、JTBに入社し、団体旅行が主流だった時代から、海外旅行のパッケージツアーの隆盛、個人旅行への転換期までを見届けてきた。国内旅行の仕入れや商品造成、宿泊施設との折衝など、まさに観光の最前線に身を置いてきた。定年後は箱根町観光協会の専務理事へ。観光庁が推進したDMO（観光地域づくり法人）の立ち上げにも尽力し、箱根全体の観光組織を一から構築していった。「受け手としての観光地側と、送り手である旅行会社の両方を経験してきたからこそ、できたことも多かった。」と、当時を振り返る表情には誇りがにじむ。



観光地にはない「自分で見つけた感動」があるのでしょうね。

ご縁で託されたキャンプ場

寄に戻ってきたのは、そんなキャリアの晩年。蜂花苑キャンプ場の創業者（オーナー）から販売促進を頼まれたのがきっかけだった。経営は火の車。だが、オーナーが急逝し、相続人もいない中で、「後は頼む」と託された。「正直、困りましたよ。でも、やるしかない」と腹を決めました。」株式をすべて取得し、令和2年から本格的にキャンプ場運営に乗り出した。まったくの素人から始めたキャンプ場経営。だが、コロナ禍が思わぬ追い風となる。密を避けたレジャーとしてキャンプが注目を集め、前年比150%の来場者を記録した。初心者にもやさしい環境づくりが功を奏し、口コミがじわじわと広がっていった。



川のほとりの静かな再発見

「私が思う寄の一番の魅力は、中津川ですね。」自身も子どもころ、石を積んでプールを作り、友だちと泳いだ思い出があるという。今も蜂花苑キャンプ場の目の前を流れる中津川には、川遊びを楽しみにくる家族連れの姿がある。「寄は、身近な自然の宝庫。お客様の多くが『こんなところがあったんだ』って驚いて帰っていく。観光地にはない『自分で見つけた感動』があるのでしょね。」非日常ではなく、豊かな日常の延長線にある寄の自然。川のせせらぎ、夜の虫の声、木々のゆらめきが、訪れる人の五感をゆっくりとほめてくれる。

人がつながる場所を目指して

地域の記憶をたどれば、自治会や寄地区振興協議会等の活動の中心に、いつも高橋さんの姿があった。消防団さらには地元の森林組合まで、町の歴史とともに歩んできた。「地域の人が手入れしているから、風景が残る。そう思うのです。」蜂花苑キャンプ場も、ただ泊まるだけの場所では終わらない。いま高橋さんは、地域の魅力をつなげる拠点づくりに挑もうとしている。新たに整備される管理センターとの連携や、地域内の施設同士の情報共有や交流の場の創出——すべては、寄という地の未来につながる道だ。「仕事場がどんどん近くなってるね。最後は、家から5分の職場になった（笑）」笑顔の裏に宿る、静かな覚悟と継続力。75歳の今もなお、『観光』を通じてここに新しい風を吹き込んでいる。寄の森とともに、まだまだ道は続いている。

うづも
宇津茂

寄り道の、川音宿

製材所から始まった寄の一角で、民宿・食堂・スナック・グループホームまで時代を編んだ女性の物語

仙口オーナー

川野美智子^{さん}
かわの みちこ

04

Web版はコチラ

製材所の娘として

松田町寄の中でも、民宿仙口のあたりは特に水が豊かな場所。父が建てた製材所は、やがて時代とともに役目を終え、川野さんは結婚・出産を経て、33歳の時に寄へ戻ってきた。「うちの古い家を人に貸していたのだけど、ちょうど返してもらってね。戻ってきてから、山登りの人たちが泊まりたいって言うようになって。そこから民宿を始めたの。」最初は小さな山小屋のような民宿から始まり、やがて「仙口」という屋号で建物を構え、昭和55年に正式にオープンした。国の観光施設向け貸付制度を利用して借り入れた金額は当時の3500万円。「これを返すのが大変だったのよ。」と苦笑いで語る。それでも「やるしかなかった。」と振り返る川野さんの姿勢には、土地に根差した暮らしを諦めずに続けてきた覚悟がにじむ。



バレルサウナは2025年秋に完成予定



経営のかたわら、自宅の茶室にて、お弟子さんとともに茶道を楽しむ川野さん

レジャーブームと「若葉まつり」

仙口の全盛期は、まさにバブルの時代。宿泊予約は夏場3年先まで埋まり、ボーイスカウトや登山客など団体客でにぎわった。「1日に150人という団体もあったね。炊き出しのおばさんが5、6人がかりだった。」そんな中、地域で始まった『若葉まつり』は、川野さんが中心の一人として立ち上げた企画だった。「地域の人の伝手で、川崎からお神輿の担ぎ屋さんに来てもらってね。うちの庭で一斗樽で子供神輿を作ったのよ。」1977年に始まったこのまつりは、現在も寄の春の風物詩として毎年開催されている。「最初はただ楽しいことをやりたくて始めたんだけどね。気づいたら、地域の名物になっていた。」地域の人たちと一緒に積み重ねた季節の行事が、やがて町の文化となっていた。

グループホームへ、 そしてサウナ付き民宿へ

平成に入ると、観光客の数が徐々に減少。民宿業が陰りを見せる中、川野さんは次の一手を打つ。2002年、県内初となる介護保険適用のグループホームを2階部分に開設した。「観光客が10分の1に減っちゃって。でも、介護保険制度ができたから、これでまた活用できると思ったのよ。」地域の人材と協力しながら、民宿の運営を一部残しつつ、地域福祉の現場へと展開。さらに最近、民宿の施設の奥にあるログハウスを改修し、一棟貸しのサウナ付き宿泊施設として再生中だ。「サウナは、30年程前に、自分が入りたくて作ったの。そしたら、若い人たちが『面白い』って言うてくれて。」子ども用の滑り台や池も整備したとのこと、これからは「お父さんがサウナに入っている間、子どもたちは外で遊べる場所になるの。」と笑う。

「来てもらった人にまた来てもらおうこと」 それだけを考えてきたの

「人が来れば、また来てくれる」

商売における信条を尋ねると、川野さんはこう即答した。「一人逃がしたら百人逃がす。来てもらった人にまた来てもらおうこと。それだけを考えたの。」昭和から平成、そして令和へ。民宿、スナック、食堂、グループホーム、サウナ付き民宿と、時代と地域のニーズに合わせた次の一手を打ち続けてきた川野さんの姿は、寄の女性たちのたくましさを実現している。「今が、最後の挑戦だと思っているの。お客さんが『また来たい』と思える場所を、もう一度作ってみたいのよ。」その言葉の裏には、積み重ねてきた経験と人の記憶が、静かに息づいていた。次の春も、夏も、ここにはまた未来へのバトンを引き継ぎ、新しい物語が生まれていく。



どさばら
土佐原

寄り道の、その先で

土佐原桜の会と、風景を守る人々の物語

土佐原桜の会

松本克己 さん
まつもと かつみ

小宮弘 さん
こみや ひろし

05

Web版はコチラ

桜を植え、風景を守る

2005年の開墾

2005年12月、寄地区北西部の小高い丘の上に位置する土佐原(どさばら)地区で、住民の手により茶畑跡の斜面が開墾され、最初の抜根作業が行われた。それが「土佐原桜の会」のはじまりだった。声を上げたのは地元住民の松本さん。放棄され荒れてゆく茶畑の姿に、「ただ荒れていくのは忍びない。花でも咲けば、人の目も足も戻るかもしれない。花でもとの思いから、仲間に声をかけ、桜の植樹を提案した。2006年以降、数年にわたって植樹作業や手入れが行われた。「荒れたままにしない。」—その一心で集まった人々の手で、土佐原の斜面は桜の丘へと変わっていった。



桜が咲いて、「ああ、今年も春が来た」って
思ってくればそれでいいんだ。

土佐原しだれ桜まつりのはじまり

2007年春、第1回の「土佐原しだれ桜まつり」が開かれる。地域で最も古い「みやま淡彩桜」が咲く民家の庭先で甘酒の振る舞いや地元野菜などの販売を行い、地域で最も古い『みやま淡彩桜』がささやかだがあたたかな交流の場となった。以降、毎年春になるとしだれ桜まつりが続けられ、地元の人々だけでなく町外からの訪問者も、丘の上のこの静かな集落を訪れるようになった。町からの協力も得ながら、看板設置や仮設トイレ、送迎タクシーの運行なども行われ、地域を挙げた行事となっていく。桜が咲くから、今年も草刈りやるか。」そう口にするのは小宮さん。初期から松本さんと共に桜の植樹に携わり、会の運営にも尽力してきた。「別に大きなイベントをやってるわけじゃない。でも、花が咲いて、ふらっと見に来る人がいて、甘酒でも飲んで帰ってくれば、それでいいと思ってるんだよね。」しだれ桜まつりは、2007年から2019年まで毎年開催されていたが、2019年から4年間はコロナ禍により中止を余儀なくされた。だが2023年、出店は控えながらもまつりは再開。そして2024年には甘酒の提供も復活し、2025年には4日間の開催となり、再び地域に春の訪れを告げる風景が戻ってきた。



「咲くからやる」
それが続いてきた理由

草刈りや整備は年に数回。夏の斜面での作業は過酷だが、それでも手を止めないのは「咲くから」という理由だけだ。「俺たちもう歳だけども、桜が咲くと、『やらなきゃ』って思うんだよね。」誰かに頼まれたわけでも、報酬が出るわけでもない。それでも20年、桜の木と共に歩いてきた。その背景には、自分たちが見てきた風景を「残したい。」という思いがある。

桜が咲くたびに、
思い出される風景

「こういう話を聞いてくれるのはうれしいよ。記録に残るつてのは、大事なことだな。」と松本さんは言う。桜が咲くと、人は立ち止まり、空を見上げる。そしてふと、あの斜面で黙々と手入れを続けた人々の姿を思い出す。桜は、誰かの記憶を呼び起こす。「誰がやっているとこじゃないのよ。桜が咲いて『ああ、今年も春が来た』って思ってくればそれでいいんだ。」そう言って、小宮さんは大きく育った桜の木々を見つめる。20年続いてきた桜の会の活動は、名もなき手が繋いできた地域の記憶だ。2025年、桜の会は20年目の春を迎えた。かつての茶畑は今、静かな桜の丘として多くの人を迎えている。

寄り道の、くらし守

世帯わずか9。山間集落で続く暮らしの記憶と、
人の気配がにじむ風景。

中山自治会長

井澤重雄 さん
いざわ しげお

06

Web版はコチラ

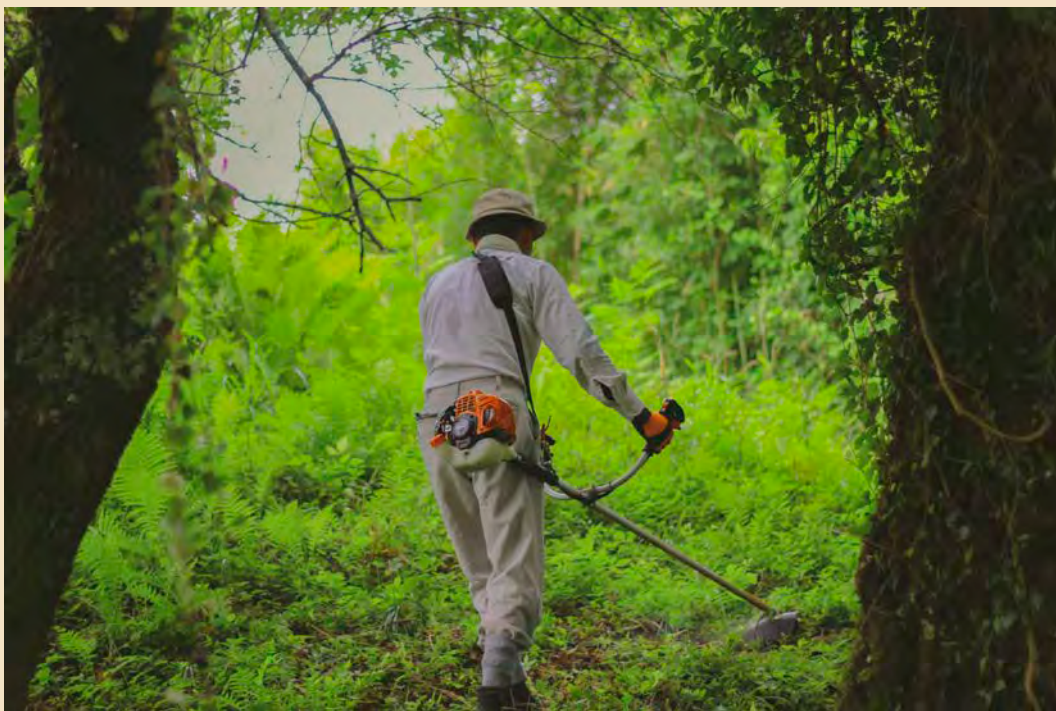
中山に生まれて

寄のほぼ中央に位置する中山集落。面積は寄の中で最も小さく、山々に囲まれた静かな谷間に広がっている。現在、自治会に所属する世帯はわずか9軒。点々と並ぶ家々には、昔ながらの暮らしが今もそっと息づいている。

「私は生まれも育ちも中山。両親も、祖父母も、みんなここで暮らしていました。」そう語るのは自治会長の井澤さん。この中山の地で生まれ育ち、今も変わらず暮らしている。最盛期には20軒以上の家が並び、にぎやかだったというが、今では井澤姓のほか、川口、松本といった昔から中山に住んでいる家系もごく限られたものになった。「子どもの頃は、小学校の1クラスに27人いました。今はもう、地域全体で20人くらいです。」少子高齢化が進んだ現在でも、井澤さんは「住み慣れた場所だから。」と語り、変わらぬ日々を中山で悠然と過ごしている。



なんだかんだ言っても、やっぱり寄が一番。
ここがいちばん落ち着くんです。



川のある風景



井澤さんの記憶のなかで、とりわけ鮮やかに残っているのが、夏の中津川の風景だ。「昔はブルーなんてなかったから、川をせき止めて泳いでましたよ。あれは本当に楽しかった。」寄にはいくつかの川遊びスポットがあり、集落ごとに『縄張り』のような場所が決まっていた。当時の集落の子どもたちは、競うように川遊びに夢中だったという。「『ハヤ』って呼んでた魚をよく釣ってました。小さな魚だけど、一心不乱になって追いかけました。」澄んだ川の流れ、冷たい水、キラキラと反射する光。川は子どもたちにとって格好の遊び場であり、自然とふれあう最初の場所でもあった。近年は河川が整備され、かつてのように川をせき止めて泳ぐことは難しくなったが、それでも川の記憶は今も井澤さんの心に残り続けている。

少ない人数で回す自治

現在の中山では、空き家を利用して二拠点居住をする人々の姿も見られるようになってきた。しかし、実際に地域活動にまで関わるケースはまだ少なく、自治会の運営は依然として限られた人数に頼っている。「年に数回、自治会館の清掃や草刈りをしています。人手が足りないのも、一人ひとりの負担が結構大きくてね。」井澤さんは現在、自治会長を務めて5年目。さらに民生委員や青少年問題協議会の委員なども兼ねており、地域のさまざまな役割を一手に担っている。「やれる人がやるしかない。そうしないと、回らないんですよ。」頼れる人が少ない分、ひとりの存在がとても大きい。それでも、誰かがやらなければ地域の暮らしが立ちゆかない——そんな切実さのなかで、井澤さんは静かに役目を引き受けている。

過ぎていく時変わらぬ気配

「昔は魚屋が3軒、雑貨屋もあって、酒屋もあった。結構便利だったんですよ。」今では中山に商店は一軒もなく、必要なものは車で町まで買い出しに行く生活。それでも、井澤さんは穏やかな口調で語る。「なんだかんだ言っても、やっぱり寄が一番。ここがいちばん落ち着くんです。」人の数は減り、山里の風景は少しずつ静かになっている。それでも、家々の窓から漏れる明かり、畑に残る足跡、手入れされた農道には、確かに人の気配が残されている。中山の道を歩いていると、その気配がふと風のにって伝わってくる。誰かが生き、手を入れ、暮らしを重ねてきた証。それは今も、この小さな集落に息づいている。

みろくじ
弥勒寺

寄り道の、畦の先

酪農から地域の未来へ。
暮らしと農のバトンを受け継いで



さとうちオーナー

佐藤浩一 さん
さとう ひろかず

07

Web版はコチラ

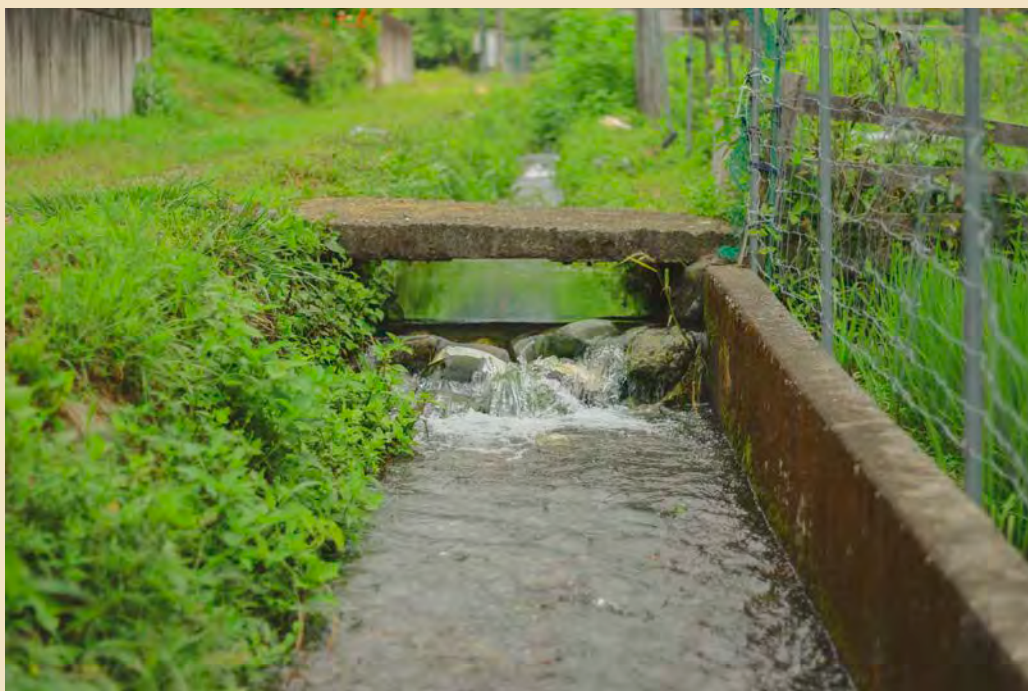
畑の前から始まる一日

「朝は結構早くてだいたい4時半に起きてます。5時半すぎには田んぼを見回りに行くし、あと犬の世話もあるしね。」佐藤さんの一日は、静かに、しかし確実に地域の自然とともに動き出す。小学校や駐在所、診療所などの公共施設が集中する弥勒寺地区で生まれ育ち、現在はお茶や米を中心に農業を営むが、その道のりは、役場勤め26年からの転身という、容易ならざる決断の先にある。「役場は2020年に辞めました。教育や保健、子育て、経済といろんな部署を経験しましたが、父が80歳過ぎて、まだ元気なうちに教わらなきゃと思ってね。」そう語る佐藤さんの言葉の裏には、この土地を次の世代に渡すという静かな決意がある。

牛の世話と通勤と

「小学生の頃はね、牛の糞をフォークリフトに積んで運んでたんです。父が酪農をやっていたんです。」佐藤さんの父は、かつて専業農家として田んぼやタバコ畑を営み、やがて酪農に転じた。「牛乳は価格が安定してるから。」と始めた酪農は、最大で20頭の牛を飼う規模に。しかし、朝晩の搾乳や手のかかる世話により、収入と労力のバランスが難しくなり、2000年頃にやめたという。大学を卒業した佐藤さんは、鉄道関係のSEとして横浜、秋田などを飛び回った。だが、結婚を機に地元に戻る決意を固め、役場へ転職。やがて父の農業を継ぐ選択へとつながっていく。

年金と合わせて少し稼げるような仕組みがあれば、きっと農地は守れる



農業の現実と理想あいだで

「農業一本で生活するのは、いかんせん厳しい。でも、やらなきゃいけないって思いがあったから、なんとか続けてるんですよ。」現在は、加工品のシフォンケーキづくりにも挑戦し、週末には横浜など町外のマルシェにも出店している。「お茶も米も、結局は『売る力』が大事。荒茶をJAに下ろすだけじゃ、厳しいですから。」日々の草刈り、仕込み、出店準備。忙しさのなかでも、「出ていけば、ちょっとずつ『寄に行ったことある』っていう人も増えてきた。」と笑う。

次の世代へ渡す仕組みを

「この先、農業で暮らせる仕組みをつくっていかないと、耕作放棄地は増えるばかり。」佐藤さんは、地域内での雇用創出や、引退後の高齢者の就農支援、体験型のファンコミュニティ農業の可能性にも注目する。「60代、70代の人たちが、年金と合わせて少し稼げるような仕組みがあれば、きっと農地は守れる。」農業は、ただの生業ではなく、地域の風景そのものだ。草を刈る手、米を干す手、お茶を摘む手。そのひとつひとつが、寄の未来の風景を形づくっている。

自分の手で、暮らしを耕す

「親父の代までやってた酪農。お茶も田んぼも、続けていけないといけないなって思ってた。」地域の農業を続けるということは、経済的な苦労だけではなく、精神的な責任や周囲とのつながりも背負うことだ。けれども、それでもやるのは「やっぱり、ここだから。」という思いがあるからこそ。小さな農業、けれど大きな意味。その重みを一人背負いながらも、佐藤さんは静かに、そして確かに、寄の未来を耕している。



募集・案内

私たちは、本誌「YADLOG」の発刊による情報発信を通じて、寄地区の活性化を目指しています。この趣旨に賛同し、寄地区と一緒に盛り上げていく仲間を募集しますので、ご関心がある企業・団体の皆さまは、ぜひご連絡ください。

01

配架店舗募集

「YADLOG」を配架していただける店舗を募集します

*20部以上の配架 / 郵送または納入

02

読者への優待提供店舗募集

読者が来店した際に、優待特典の提供を行っていただける店舗を募集します。店舗の情報を紙面にてご案内させていただきます。

*商品代や利用料の値引き、記念品の贈呈、追加のサービス提供等

03

広告掲載募集

紙面に広告を掲載していただける企業・団体様を募集します。

*1枠5,000円～ / サイズ等は要相談

04

インターン募集

「YADLOG」は、寄(やどりき)の暮らしや風景を記録し、未来へつなぐまちづくりの一步です。ここでは、人と出会い、声を聴き、風景を残す体験があります。それはただの記事作りではなく、地域の未来を形にする時間。そんな現場と一緒に関わってくれるインターンを募集しています。小さな里山から始まる物語を、ぜひ共に紡いでください。

取材先の情報をご提供ください。

本誌「YADLOG」では、寄地区の魅力的な人物を紹介することで、この地域の良さを発信していきたいと考えており、次号以降に取材させていただく方を探しています。自薦・他薦を問いませんので、「こんな人がいるよ!」という情報を編集部までお寄せください。

編集後記

最後まで『YADLOG Vol.1』をお読みいただき、ありがとうございました。

『YADLOG(ヤドログ)』という名前には、寄(やどりき)の「YADO」と記録の「LOG」を重ね、「この土地の声を静やかに、丁寧に記録したい」という願いを込めました。語られることの少ない風景の記憶、人と人が紡いできた日々の営み—私たちはそれらを、そっとすくい上げ、ページに綴っていきたくと思っています。

今号では、寄の7つの集落に暮らす方々の声を辿りました。誰かの人生に触れることは、風景を見つめ直すことでもあります。ページをめくる中で、読者のみなさんにとっても、「懐かしさ」と「新しさ」がそっと同居するひとときとなっていれば、これほど嬉しいことはありません。

YADLOG編集部



石井久和

いしい茶園／網右衛門有限会社

寄の暮らしと風景を、皆さんと共に未来へ紡いでいければ幸いです。



米山愛莉

松田町定住少子化担当室

誰でも「やどりき」と読めるくらい、寄の魅力を広くPRしてまいります!



大澤 拓

松田町観光経済課

寄地域の方々の魅力が、より多くの方に伝わることを願っています!



長谷部 駿

慶應義塾大学環境情報学部

YADLOG への関わりを通して少しずつ寄のことを知っていきたくと思っています!

やどりきマップ



イベント情報をご提供ください。

寄地区の企業・店舗・団体様が主催となって開催するイベントの情報を本誌に掲載しませんか？ぜひ情報をお寄せください。

03 蜂花苑

☎ 0465-25-5143

✉ yadorogi@houkaen.jp

蜂花苑 寄



高橋 始 さん

04 民宿仙口

☎ 0465-89-2037

📷 minshukusenguchi_

民宿仙口 寄



川野美智子 さん

07 さとうち

☎ 0465-87-8315

📷 satouchi.ch

さとうち 寄



佐藤 浩一 さん

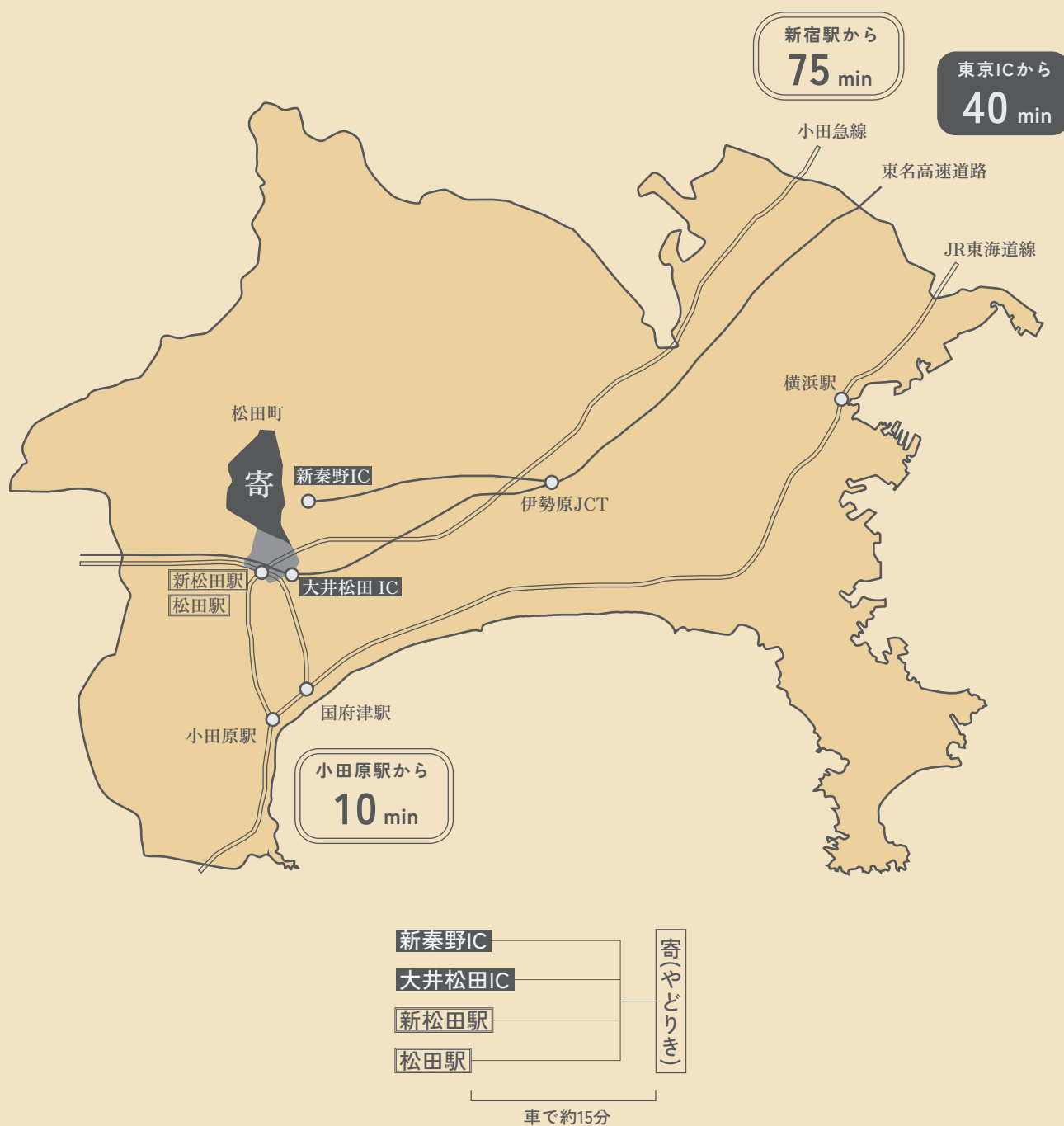


松田町の観光情報はこちら



Instagramにて
随時情報を発信中！

アクセスMAP



YADLOG(ヤドログ) Vol.1

発行日 2025年9月20日
発行元 松田町役場
編集 YADLOG編集部 (綱右衛門有限会社)

お問い合わせ

YADLOG編集部 (綱右衛門有限会社)
E-mail info@tsunaemon.com
松田町役場
TEL 0465-84-5541 (定住少子化担当室)

YADLOG

ヤドログ